

枕草子 第九回

その八の三 姫宮の御方の童女の

今年四歳になられた姫宮、中宮さまと一条天皇との御子であられる脩子内親王さまのお世話をする童女が身につける装束を新調するようにと、中宮さまがおっしゃられたとき、生昌ときたら、つきましては、そのあこめのあこめの上に着られる上襲うわおそいは何色にすればよいでしょうか、などと聞いておりました。衵あこめはあくまで下着なのですから、単に上襲の色を聞けばいいものを、わざわざ衵の上に着る上襲などと言うものだから、中宮さまがお笑いになったのはあたりまえ。

そのうえ生昌は、姫宮がお使いになれる御膳なども、普段みんなが使っているような武骨な足が付いたものは可愛い気がありませんから、平たい角盆たかづきの、ちっこい折敷おしきのうえに、ちっこい足の着いたちっこい高坏たかづきなんかを配したものがいいんでなかるかな、などと、田舎訛りの混じった変な言い方をするものだから、私がつい、姫宮さまがそういう御膳で召し上がれば、さぞかし、下着に上掛けをかぶった童女たちも、お世話がしやすいことでしょうねと言うと、中宮さまは、そんなにしつこく、普通の人を相手にしている時のような言い方をして笑いものにするものではありません。このお方は、いたってまじめでおとなしい、きんこう謹厚きんこうなお方なのですからね、ほんとうに可哀相じゃありませんかと、おっしゃられたのが、なんだか奥ゆかしくて面白かった。